

幼児の歌唱能力についての分析—その3—

○今津重紀

村上玲子

(宇部短期大学)

近年、幼児の日常生活を取り囲む環境は、複雑多岐である。特に音楽的環境においては刻々と変化しつつ、しかもその程度の差は、かなり激しいものである。一方では、テレビから流される商業ソングやマンガの主題歌、歌謡曲を声はり上げて歌い、また一方では、わらべうたや童謡を遊戯の中に取り入れて口ずさんだりしているという現状なのである。そこで、われわれは、以前幼児の歌唱能力についての分析その1、その2において幼児の嗜好する歌についての歌唱の正確さという観点から比較分析を行なったが、今回の調査では、その分析方法をより詳細に検討し、現在のような複雑な音楽的環境の中で果たして幼児はどのような歌唱傾向を示しているのだろうか、また、どのように捉えているのだろうか、などの点を幼児の歌唱能力という観点から比較分析を試みたものである。

調査方法

1. 調査期間：1978年 6月下旬～7月上旬、12月中旬。
2. 調査対象：U市内3ヶ所の幼稚園児101名。表1に示したとおりである。

表1. 調査対象園児数 (数値は人数)

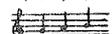
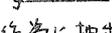
年齢別	男児	女児	計
4才	9名	15名	24名
5才	15名	27名	42名
6才	16名	19名	35名
計	40名	61名	101名

3. 調査内容：自由保育の時間に幼児自身に日常好んで歌う歌1曲を選ばせ、それを実際に歌わせた。これらの歌を録音、採譜した上で、①曲の嗜好、②旋律、③リズム、④テンポ、⑤調性、⑥歌詞、⑦発声、⑧感情表現(ここでは、③～⑥までを歌唱能力として捉えた。)などの点から解析し、比較、検討した。

結果及び考察

①曲の嗜好：今回の調査で録音した総曲数のうち、上位10曲は、1位チューリップ、2位セツ、3位サウスポー、4位コンバットラーV、5位ドロップスの歌、6位一週間、7位しまつね、8位ちよ

うらよう、9位かえろの歌、10位キャンディーキャンディー、以上である。これをみると10曲中7曲までが幼児歌曲で残り3曲がテレビ主題歌及び歌謡曲となる。全体的には男児はリズムカルで勇ましい曲を好み、女児では比較的静かなかわいらしい曲を好むように思われる。

②旋律：①よく歌えている、②大体歌えている、③全く歌えていない、の3項目に分けて分析してみた。これを年齢別にみてみると、①よく歌えている、4才児4%、5才児24%、6才児37%、②大体歌えている、4才児54%、5才児68%、6才児57%、③全く歌えていない、4才児42%、5才児38%、6才児6%とかなり著然の差ながら年齢が進むにつれてよく歌えているように思われる。また、3音による順次進行の上行形  及び下行形  を旋律中から無作為に抽出し、年齢別に比較してみた。その結果、4才児では上行形25%、下行形22%、5才児では上行形48%、下行形37%、6才児では上、下行形あわせて90%が正確に歌えていた。これによると、4、5才児においてはミレドのような下行形よりも、ドレミのような上行形の方が音程がとりやすいという傾向がみられるように思われる。

③リズム：全体的に旋律よりもよくとれているように思われる。年齢別にみてみると、4才児50%、5才児86%、6才児89%が正確にとれている。また、これを性別にみてみると、4才男児11%、女児73%、5才男児87%、女児93%、6才男児61%、女児100%となっており、各年齢男女児の差がよくなっている。特に4才児では男女差が大きいように思われる。リズムにおいても旋律と同じように年齢が進むにつれてよくとれるような傾向がみられる。4才児では単純なリズムの曲、例えば、チューリップ、ちよちよ、どうさんなどにもリズムの設けがみられるが、5才児になると単純なリズムの設けは少なくなり、テレビマンガの主題歌や歌謡曲、例えば、サウスポー、キャンディーキャンディーなどリズムの複雑なものに設けが多くなっているように思われる。6才児では複雑なリズムもとれているようであるが、シンコペー

ションなどのリズムは言葉と結びつけて感覚的によく捉えているのではないかと思われる。しかし、長音符を正確にのびる事や休符が正しくとれていない傾向がみられるように思われる。

④テンポ：4才児54%、5才児69%、6才児89%が正確にとれている。これを性別にみてみると4才男児13%、女児73%、5才男児60%、女児74%、6才男児81%、女児95%と存、しており、テンポにおいても女児の方が正確にとれているように思われる。テンポの狂、1才幼児をみると、初めからテンポのとれなから、途中からテンポが狂、くる着の2つに大別されるように思われるが、初めからテンポのとれなから、1才者は全体の50%、途中からテンポの狂、1才者は48%であった。途中でテンポの狂、1才幼児はほとんどが速くなり、最初からテンポのとれなから、1才幼児も、4、5才児ではほとんど指定のテンポより速く歌、ていたように思われる。また、6才児の多く最初からテンポのとれなから、1才者3名中、2名が指定より遅いテンポで歌、ていた。これは曲がドロップスの歌という幼児にと、2は高度は曲が、1ためではないかと思われる。

⑤調性：最初の音を与えていたため、様々な調が出現した。全体的な特徴をみてみると、(1)最初から全く調性のない者、(2)最初は調性か、きりして途中からなくなってしまう者、(3)最初は調性がないが途中から調性が現われる者、(4)途中で転調する者、(5)最初から最後まで同じ調性の者、に分類されるように思われる。途中で転調した幼児のほとんどは、近親調以外の全く肉体的ない調に転調しているように思われる。最初から全く調性のない者は、4才児29%、5才児30%、6才児29%と各年齢ともほぼ同じである。次に歌、はじめての調性は4才児では、Es-dur、H-dur、8%、5才児では、Des-dur、14%、Es-dur、10%、E-dur、G-dur、7%、6才児では、Des-dur、C-dur、11%、H-dur、9%、と存、している。各年齢に共通して出現している調は、Es-dur、H-dur、である。また、最初から最後まで同じ調で歌、えた幼児は4才児21%、5才児29%、6才児27%、と存、している。これによると、4才から5才にかけて調性が複雑さ小くなる傾向がみられるように思われる。

⑥歌詞：4才児50%、5才児74%、6才児80%が正確に歌、ていた。性別では、4才男児11%、女児73%、5才男児53%、女児85%、6才男児88%

女児74%と存、している。歌詞の読りは、(1)は、きり歌詞を記憶して、(2)は、記憶はしているが途中で忘れてしまった、(3)単語の意味が理解出来ないため誤、り記憶している、(4)発音がうまく出来ない、(5)助詞の使い方が違、っている者などに分けられるように思われる。

⑦発声：4才児67%、5才児74%、6才児91%が無理のない発声をして、いた。性別では、4才男児13%、女児54%、5才男児45%、女児89%、6才男児88%、女児95%、と存、している。悪い発声をした者のうち男児の場合には元気がよく歌、う事が怒声に似た形と現われるように思われる。女児では、全く元気がない歌、い方をした者がみられた。

⑧感情表現：4才児42%、5才児71%、6才児88%が自然な感情で歌、ていた。実際に、音楽性、感情表現は幼児の段階ではまだ、きりとは現われていないと思われ、その判定方法については向題があると思われ、このことは、元気がなく、感情が入、ていないと思われ、幼児と逆に怒声に近い声で歌、ている幼児を感情表現に乏しいとして扱、いた。

おわりに

今回の研究では、より正確な採録及び、録音時期によるシングルの不均等などを再検討し、より詳細に歌唱を通じての幼児の母令別、性別による歌唱能力の発達、特徴をみようとしたりものであるが、一応、歌唱能力は母令と進歩について順調な発達を示す傾向を得た事が出来たと思われる。また、性別に因しては、各能力とも、おおむね女児の方がよく出来るように思われる。特に4才児における男児、女児の能力差はかなり激しいと思われ、尚、幼児に自由に好きな歌を歌、わせたため、曲に於ける難易度の差が大き、く、正確な能力の把握のためには、曲を限定した方がよ、い、たのではないかと思われる。また、幼児の歌唱は気分による左右されやすく能力の把握の仕方など、今後の研究に委ねたいと思、う。

参考文献

- 1) 青原玲子、今津重礼、中邑平八郎：「幼児の歌唱能力についての分析-その1-」日本保育学会大会研究論文集第30号、1977年。
- 2) 今津重礼、村上玲子：「幼児の歌唱能力についての分析-その2-」宇都短期大学学術報告第15号、1979年。